

はじめに

モチベーション研究所の年次報告書『モチベーション研究』第8号をお届けいたします。

2018年度はモチベーション研究所の組織変更があり、新しい体制での幕開けとなりました。まずはその報告をさせていただきたいと思えます。

2017年度まで所長を務められた角山剛先生の東京未来大学第4代学長就任に伴い、モチベーション研究所顧問の職をお願いすることとなり、2018年度からは所長の職を高橋が引き継ぐこととなりました。また、前学長の大坊郁夫先生には名誉研究員として引き続きご指導いただくこととなりました。さらに新たに東京未来大学こども心理学部の日向野智子先生を研究員としてお迎えし、研究体制のさらなる充実を図ることができた年となりました。

フォーラムについてもその回数を重ね本年度で第13回となっています。第12回は2018年10月に『移行期の家族を支える—離婚・再婚を経験する家族への支援』と題して小田切紀子先生（国際東京大学人間社会学部教授）に、第13回は2019年2月に『被災した公務員のストレス』と題して松井豊先生（筑波大学人間系教授）にそれぞれご講演いただきました。いずれも盛会のうちに終了しそれぞれのテーマに対する関心の高さを示すものとなりました。小田切先生のご講演内容につきましては本号にその要旨を掲載させていただいております。松井先生のご講演内容についても次号に掲載を予定しております。フォーラムは今後も年2回の予定で開催を企画しております。

モチベーション研究所の研究成果

モチベーション研究所では墨田区教育委員会事務局すみだ教育研究所と連携研究ならびに実践協力における成果について2018年度の日本応用心理学会第85回大会（於：大阪大学人間科学部、平成29年8月25日～26日開催）にて発表を行いました。埴田 健司・小林 寛子・磯 友輝子・角山剛による「小中学生の学習行動を促進する介入方法の検討（1）—自己価値への介入が自己評価に及ぼす影響—」と小林 寛子・埴田 健司・磯 友輝子・角山 剛による「小中学生の学習行動を促進する介入方法の検討（2）—利用価値への介入が理科の価値認知・興味追求に及ぼす影響—」の発表2題が「教育・発達・人格」部門の優秀大会発表賞を受賞しました。非常に名誉なこととその受賞を素直に喜ぶとともにモチベーションに関する教育・研究の重要性と社会的ニーズの高さを再認識いたしました。これも各研究員どの努力の賜物として皆様に一言ご報告させていただきたいと思えます。

平成を振り返って

2019年をもって“平成”が終わり、新しい元号に改元されます。明治以降、歴史的に稀有な経験をする私たちはこの時代の変わり目に何を思うのでしょうか。平成を振り返ってみると、これまで日本は安全な国だという神話の上に胡坐をかいていた私たちを震撼させるような出来事がおこった時代でもありました。阪神淡路大震災、東日本大震災をはじめとする大きな地震の経験と、地下鉄サリン事件など一連のオウム事件を通して私たちが学んだことに対する代償は計り知れないものであったかもしれません。

1995年3月20日8時20分、通勤途中にあった私は霞ヶ関駅で日比谷線が止まっていることを知り、本来ならば丸ノ内線から日比谷線に乗り換え神谷町の駅で下車するはずでしたが、駅を出て歩いて当時勤めていた虎ノ門の会社に歩いて向かいました。その時はまだ特に異変は感じられずちょっと厄介だが電車を待っていて遅刻するより、10分程度歩いて確実に出社した方が問題は少ないとの考えで一番近い出口から地上に出たのを覚えています。しかし、この何気ない判断がその後の生活を大きく左右することになったかもしれないと思うと恐怖を覚えざるを得ません。

勤務先では幸い被害にあった同僚はいませんでした。時間とともに近くで起きている出来事に驚愕し、テレビから流れる情報にくぎ付けになっていました。その時はサリンが撒かれたことなど知る由もありませんが、やけに目がチカチカしていたことを覚えています。皆の服にももしかしたら気化した劇薬が微量ながら付着していたのかもしれません。直接的な被害を被ったわけではありませんが、それこそ数百メートル先で大惨事が起きていても何も知りようがない状況と何もできない自分に何とも言えない複雑な感情を覚えたのを今でも鮮明に記憶しています。

この事件から24年が過ぎました。被害を受けることがなかった私であつても今回このような文章を記した心理には自分でも整理できない複雑なものがあったのだと思います。この事件に対して2018年にある意味での清算がなされことに対して、単なる傍観者としての感情以上のものがそこにあつたに違いありません。

巻頭言としてこのような文章を残すことは適切でないかもしれませんが平成という時代を振り返ることによって、新しい時代への期待と希望を膨らましたという願望の逆表現なのかもしれないと“私”を説得している“私”がそこにいるような気がします。

本研究所の活動も少しずつではありますがその成果が表れつつあります。今後とも皆さまのご理解とご支援を賜ることができますよう、よろしくお願ひいたします。